

令和6年9月

第三次横浜市民読書活動推進計画策定に向けた
市民ワークショップ「みんなの読書を語るワークショップ」
実施報告書

empubliс 

<目次>

1. ワークショップ実施概要	2
(1) ワークショップの開催目的	2
(2) 実施概要	2
(3) ワークショップの流れ	2
2. ワークショップでの参加者からの主な意見	4
(1) 【小学校5年生から高校生対象】	
みんなが本を読みたくなるにはどんなしかけやイベントがあると、 より本を楽しく読めるようになりますか?	4
(2) 【18歳以上（高校生を除く）対象】	
①子どもたちが本を楽しく読めるようになるには?	7
(3) 【18歳以上（高校生を除く）対象】	
②本を介した交流や企画、どんなイベントがあると本を読むきっかけになりますか? ...	10
3. 全体所見	14

1. ワークショップ実施概要

(1) ワークショップの開催目的

- 横浜市では、第三次横浜市民読書活動推進計画の策定に向けて検討を行っています。その一環として、市民の皆様から、より効果的な施策につながる意見を伺うことを目的に「みんなの読書を語るワークショップ」を開催しました。
- 本ワークショップでは、対象者の読書の状況、読書環境、今後の希望を把握すると共に、「読書を広げるには？」というアイデアを直接お伺いするだけでなく、参加者自身の読書体験をふりかえり、話し合うことを通して読書のきっかけや効果などについての考えを深めた上で、読書活動を活性化するアイデアを出す話し合いを行いました。
- 読書習慣を形成するのに大切な小中高生の意見を聞く「小学校5年生～高校生対象」と「18歳以上（高校生を除く）対象」の回を開催し、より多様な視点で活発な意見交換ができるように開催しました。
- ワークショップを通して、市民にとっての読書に対する考え方だけでなく、読書体験の前後の行動や心の動きへの理解を深め、より市民生活の実態に即した読書活動推進のヒントとなる意見を把握し、施策検討へ活かすことにしました。

(2) 実施概要

2日間2会場で、それぞれ対象者別に実施し、計46人の参加がありました。

実施予定日時		参加者数	実施予定会場
7月28日(日)	【小学校5年生～高校生対象回】 10:00～11:30	8名	戸塚地区センター 会議室A (戸塚区戸塚町127 戸塚センター2階)
	【18歳以上(高校生を除く)対象回】 14:00～16:00	18名	
8月3日(土)	【小学校5年生～高校生対象回】 10:00～11:30	4名	中川西地区センター 会議室1 (都筑区中川2丁目8-1)
	【18歳以上(高校生を除く)対象回】 14:00～16:00	16名	

(3) ワークショップの流れ

今回のワークショップでは、小学校5年生～高校生対象回、18歳以上（高校生を除く）対象回共に、共通の枠組みで実施しました。ただし、対象者やテーマによって、参加しやすいよう調整しました。

【テーマ】

対象者	テーマ
小学校5年生から高校生	みんなが本を読みたくするにはどんなしかけやイベントがあると、より本を楽しく読めるようになりますか？
18歳以上（高校生を除く）	①子どもたちが本を楽しく読めるようになるには？
	②本を介した交流や企画、どんなイベントがあると本を読むきっかけになりますか？

【プログラム】

第1部 横浜市より、ワークショップ開催趣旨とこれまでの読書推進の取組の紹介

第2部 意見交換

1. 自己紹介+心に残る本

(小中高生向け：今のお気に入りの本、大人向け：自分にとっての思い出の本)

2. 読書の参加者自身の現状と地域の現状認識について

(読書の状況、読書の方法、読書に関わる活動への参加)

3. 参加者にとっての大切な本に関するエピソードについて

(参加者それぞれの具体的な読書体験を共有し、それを基に「読書のきっかけ」「読書の効果」について意見交換を行った)

4. 読書推進の市の施策のアイデア、提案の募集

(読書の現状と読書のきっかけ・効果について話し合ったことを踏まえて、今後の市の読書推進活動へのアイデア、提案を集める)

図表 ワークショップの様子

■7月28日(戸塚区:戸塚地区センター)

子どもの部



大人の部



■8月3日(都筑区:中川西地区センター)

子どもの部



大人の部



2. ワークショップでの参加者からの主な意見

- (1) 【小学校5年生から高校生対象】みんなが本を読みたくするにはどんなしかけやイベントがあると、より本を楽しく読めるようになりますか？

【戸塚地区センター】

○ 読書の状況

- ・ 読書が好きな生徒は、小中高どの世代でも図書委員をしていることが多い。
- ・ 同世代に人気の本や、友達が読んでいる本には興味がある。逆に、自分の好きな本を友達にも読んでもらいたいと思っている。
- ・ 読書好きな生徒は、自分の関心あるテーマに限らず、様々なテーマの本に触れたい、新しい本に出会いたいと思っている。お勧めの本は中学と高校など世代を超えても共感できるし、興味を持てる。
- ・ 図書館などでは年齢相応の本を勧められるが、それに限らず、大人向けとされる本も読みたいと考えている。
- ・ 大人向けの難しい本を読みたい時、話題の本を読みたい時は、学校図書館ではなく図書館に行くなど、図書館を使い分けて利用している。
- ・ 高校生になると通学時間が読書の時間として良い。
- ・ 学校の休憩時間は、友達と話す人、遊ぶ人が多いので、1人だけで学校図書館に行くことは難しいと感じている。
- ・ 読書は読書として楽しみたいので、あまり勉強と結びつけない方がいい。

○ 読書のきっかけ

- ・ 親や家族が本好きであったり、常に家に本がたくさんあったりしたことで、本に興味を持ち、本を読む習慣がついたという生徒が多くいた。
- ・ 親が自分の若い時の体験談などと一緒に勧めてくれた本は読んでみたいと思った。

○ 読書をめぐる交流

- ・ 本が好きな生徒は、学校の中で友達と読書について話す機会はあまりないと感じている。学校の友達同士の会話では、話題のものや相手の関心度に合わせて本の話題を選んで話しており、自分の好きな本を気兼ねなく話したいと思っている。
- ・ 親からはノウハウ本などを紹介される。小説などは自分で好きなものを見つける。
- ・ 学校の朝読書があると、そこで読んだ本の話などもできる。

○ 学校図書館・図書館、学級図書

- ・ 学級図書は先生が管理していることが多い。図書委員が学校図書館から読んで欲しい本を借りてきて置いている事例もあった。
- ・ 学校図書館や図書館は騒いではいけない場所、話してはいけない場所というイメージを持っており、本について話す場というイメージを持ってはいない。
- ・ 図書館のイベントに参加したことがある生徒もいるが、イベント情報に触れることは少ない。ワークショップは親の紹介、司書からの声かけがあって参加した。

○ デジタル活用

- ・ YouTube で本の情報を得ている生徒もいるが、一方でネットから本の情報は得ていない生徒もいる。
- ・ 電子書籍よりも紙がいいという意見が多い。電子書籍で読書をするとう画面酔いをしまうという声もあった。市の電子書籍サービスは本の概要が載っているので、それをヒントに新しい本を読んだ経験のある高校生もいた。

<読書を広げるアイデア>

○ 学校の取組み

- ・ 朝読書を行い、学校で読書のための時間をつくる。
- ・ 「読書＝勉強」のイメージを脱し、読書の楽しさ自体を伝える。
- ・ 生徒同士で読んでいる本を紹介しあい、新しい本を知れるといい。
- ・ 学校図書館の貸し出しランキングや学校の生徒が読んでいる本の紹介
- ・ 生徒の興味に沿って本を入れ替えるなど、学級図書を効果的に使いたい。
- ・ 学校図書館でビブリオバトルをしたり、学校図書館開放日など、友達と賑やかに話すことを推奨する日をつくり、友達同士で図書室に行くきっかけをつくる。
- ・ 読書の苦手な人にも本を読んでもらうためのアイデアや情報について、他校の生徒と意見交換できたらいい。
- ・ 学校図書館に、流行っているアニメの原作やそのテーマに関する本、アニメのセリフで引用されている本を置く。
- ・ アニメの設定の科学的な検証など、好奇心がくすぐられる本・問いかけをきっかけにして、原作を読むようになる。
- ・ 学校図書館では、装丁やイラストが美しい本を、表紙が見えるように陳列する。
- ・ 学校図書館で本の苦手な人も読みたい本を探せるように、ポップをつくるなどして、本の内容を分かりやすく伝える。

○ 図書館・地域・家庭の取組み

- ・ 親が子どもに自分の好きな本を勧める。
- ・ 本に関するイベントなどを学校経由だけでなく地下鉄や公共機関、有名スポットにも掲示しPRしていく。
- ・ 有名な作家、地元出身の作家によるおすすめ本紹介や本に関するイベントの実施
- ・ 図書館で子供が話したり、にぎやかに使ってもよい日やイベントの実施
- ・ 絵本などの子どもが大好きな要素を取り入れたイベントの実施
- ・ 地域で、本を入場券代わりにして、本を交換しあうイベントの実施
- ・ イベントの学校での紹介。イベントは無料または低価格で参加しやすくする。
- ・ 本の紹介に X など SNS を活用する。YouTube のショート動画等、子どもが気軽に見ることができるコンテンツを作成する。
- ・ アイドルなど、あまり本を読むイメージがない有名人からのおすすめ本紹介

【中川西地区センター】

○ 読書の状況

- ・ 本好きの生徒は、周りに本好きがあまりいないと感じており、学校の友達とあえて本の話をするのではないと感じている。
- ・ 学校の休み時間や通学時間を利用して読書をしている。
- ・ 本を読まない人は、部活や色々な趣味があって忙しいのではないか。
- ・ 中高生は SNS を見ている人が多い。YouTube など話題になっている本については知っていたり、読んでいる人が多い。

○ 本への関心のきっかけ

- ・ ビブリオバトルの YouTube や TikTok の 1 分動画のお勧めから興味を持った本もある。
- ・ 本の内容よりも、描かれている世界やキャラクターの紹介の方が関心を持てる。
- ・ 同世代からのお勧め本の方が興味を持つ人が多いのではないか。
- ・ 新しい本との出会いを求めて、新古書店や古本市など、手軽に本を手に入れられる場所に行く。
- ・ 親が図書館に連れて行って、「こんな本があるみたい」と教えてくれたり、読み聞かせてくれたことで本に興味をもつようになった。
- ・ 本の最後に紹介されている関連本から新しい本に出会うこともある。
- ・ 映画の原作を読みたくなくなって読書に興味を持った。さらに、それが自分の進路や関心にもつながった。

○ 読書をめぐる交流

- ・ 地域の読書に関するイベントについての情報は親から教えてもらうことが多く、子ども自身も直接情報を得られる機会・仕組みが欲しい。
- ・ ビブリオバトル等のイベントに興味はあるが、どこに情報があるのかわからない。
- ・ 今回のワークショップのように本について話せるのは楽しい。このようなイベントが身近にあるといいと思う。

○ 学校図書館・図書館、学級図書

- ・ 図書館によく通う子どもは司書に親近感を感じており、本についての話をしている。一方で、本を借りる手続き以外に、どう話しかけて良いのかわからず、きっかけがないと感じている。
- ・ 図書館では本を読むより、自主勉強をしていくことが多い。
- ・ 学級図書の貸し出しルールがクラスによって異なっており、自由に借りることができないこともある。

○ デジタル活用

- ・ 本は、紙の本を読むことが多い（デジタル本をスマホで読むと目が疲れる）。
- ・ 青空文庫や WEB 小説など、手軽に様々な本を読めるので、利用することもある。一方で、読書中の情報量・没入感は、紙の本の方が感じられる。
- ・ LINE マンガ等、スマートフォンで読める無料のマンガを読んでいる子どもも多い。

<読書を広げるアイデア>

○ 学校での取組み

- ・ 学校図書館に、アニメや映画に関連する本を充実させる。
- ・ 先生などの勧める本はあるが、ライトノベルでも図鑑でも雑誌でも、まずは否定しないで活字に触れる機会をつくるのが大切ではないか。
- ・ 学級図書を気軽に利用できるルールをつくる。
- ・ ビブリオバトルなど生徒が面白そうと思うイベントを学校図書館で行う。

○ 地域・家庭・図書館での取組み

- ・ 生徒が学校図書館や図書館での選書（ティーンズコーナーのブックリスト）の選定や紹介に参加し、同世代の声としてお勧め情報を発信できるようにする。
- ・ 本好きの同世代が集まり、お勧め本や本の魅力について話し合えるイベント
- ・ 本が好きな人による同世代に対する「読書が親しみやすくなる」活動
- ・ 子ども世代による子ども世代のための「こどもビブリオバトル」の実施
- ・ 好きな作者が特集されているイベント
- ・ YouTube、instagram、TikTok のショート動画での本の紹介（本自体の紹介でなく、あらすじを1分程度のアニメで紹介してくれるストーリー仕立ての動画や、本の特徴、作者の思いなどを紹介する動画作成）
- ・ SNS で季節ごとの本を特集
- ・ SNS で影響力ある人から本のおすすめをしてもらう。
- ・ 古本市、本のフリーマーケットの実施

(2) 【18歳以上（高校生を除く）対象】①子どもたちが本を楽しく読めるようになるには？

【戸塚地区センター】

○ 子どもの読書の現状

- ・ 司書として見ていると、学校では、限られた子しか学校図書館に来ておらず、子どもの読書習慣があまりついていないことに危機感を感じており、学校の中で本を読む時間が必要だと思っている。
- ・ 朝読書の時間は効果があると感じているが、その時間が高学年になってなくなると本を読まなくなる子どもが増える。

○ 学校図書館・図書館の現状

- ・ 学校図書館では、司書など特定の職員の選書・運営になっており、現代の子どものニーズを理解するのに苦労している。
- ・ 図書館に子どもたちを呼び込むこと自体が難しい。
- ・ 司書はそれぞれ工夫しているが、情報交換をする機会があまりない。

○ 家庭と読書

- ・ 子どもの読書習慣のためには、親自身も読書をしていることが大切であると思っているが、育児等で忙しくなるとその習慣が途切れてしまうと感じている。
- ・ 子どもが小さいうちは騒いでしまうので、迷惑をかけてはいけないと思ってしまい、図書館に行きづらい。
- ・ 図鑑は、子どもが小さい時から成長しても長く使える本だと感じており、借りるより買うことが多い。
- ・ 子ども向けの本は時間がたつと不要になることが多いので、他の本好きな人、求めている人に提供できたらと考えている。

○ 読書への関心のきっかけ

- ・ アイドル、アニメなどのサブカルチャーに関心のある子が多いので、そこから読書につながるのではないかな。
- ・ スタンプカードは本に触れるきっかけとしては効果がある。それを読書習慣にどうつなげるかが次の課題
- ・ 子どもによる図書ボランティア、司書体験、バックヤードツアーは子どもに人気。
- ・ 子どもたちは工作教室、実験教室などに行くのが好き。そこと本を絡めたい。
- ・ 電子書籍は、わからない単語をすぐに調べられることが利点であり、科学や歴史など専門用語の多い本に適していると感じている。

<読書を広げるアイデア>

○ 学校での取組み

- ・ スタンプカードを活用し、まずは学校図書館に来ることを促す。
- ・ 校内放送で本を紹介していく。
- ・ 司書同士の工夫や知見を共有するつながりづくり
- ・ 貸出数ランキング等、生徒が読んでいる本の見える化

○ 図書館・地域での取組み

- ・ 子どもが憧れる仕事、「こんな仕事あるんだ！」と知ることができる本を扱う。
- ・ 工作イベント、育児教室など、読書に関係ないイベントを図書館で実施し、図書館や本に触れる機会をつくる。
- ・ 絵本の図柄を使ったモノづくりなど、本に関連したワークショップの実施
- ・ 図書館に来てもらうだけでなく、博物館、動物園、児童向け施設など子どもがいるところへ出向き、図書イベントや、本のPRを行う。
- ・ 子どものために買ったが子が成長して不要になった本の交換会
- ・ 育児中の親が読書習慣を途切れさせないように、育児の隙間時間を使って読める本や、本から引用した1P、短いエッセイ、図鑑など触れやすい内容でお勧めする。

【中川西地区センター】

○ 子どもの読書の現状

- ・ 子どものころから習慣づけないと本を読まない人になるのではないか。
- ・ 読書を強制するとますます本嫌いになることが懸念される。読みたくなる雰囲気づくりが大切だろう。
- ・ 本に興味を持たせる工夫が必要。他の子どもたちが読んでいるもの、流行っている本には比較的興味を持つ子が多い。

○ 学校図書館・図書館の現状

- ・ 学校図書館の本が古く、今の子どもたちの興味あるものになっていないのではないか。
- ・ 学校図書館だけでは蔵書も限られ、閉じた世界になりがち。図書館に行けば学校と違う人たちから本を紹介され、新しい本、大人の本など新しいきっかけを持てる。学校と図書館がもっとつながるといいが、今はつながりが少ない。
- ・ 図書館の統計は全体の貸出数のように大枠のものが多い。世代別、タイプ別の分析などで子どもの読書傾向を明確にし、それを共有して検討することが必要では。

○ 家庭と読書

- ・ 子どもたちにどんな本を読ませたらいいのか、親は情報を探している。
- ・ 読書に関するイベントに参加したいが、開催日や時間帯の都合が悪いことが多い。子どもと親の都合が空いている時間がずれていることも多く、同じ内容を複数回してもらえたらいいなと思っている。
- ・ 親や先生が読み聞かせをしてくれて好きだった本を、後で自分で買って読んだこともある。その本を今は自分の子どもに読み聞かせている。

○ 読書への関心のきっかけ

- ・ 小学校での先生による読み聞かせが、子ども自身の友達との関わり合い方を考えたり、自分の感情に気づくといった成長の機会になっている。
- ・ 絵本と物語の橋渡しをするためにストーリーテリングが必要。
- ・ 読み聞かせやストーリーテリングは大人がこどもに「してあげる」というのは子どもにとっては一方的な押し付けに感じられる可能性もある。
- ・ 学校で、子ども同士で読み聞かせをすると、フラットな状態で純粋な気持ちで聞くことができ、それが読書につながるのではないか。
- ・ アニメーションという本への興味を育てるための手法がある。ゲームの要素などもあって面白いが、学校や図書館で未だ知られていない。
- ・ 「ぬいぐるみお泊まり会」も人気イベントなので取り入れてほしい

○ 地域活動

- ・ 地域の図書ボランティア活動をしている人の活躍の場があまりない。自力で活動の場を探すのに苦労している。
- ・ 司書同士や図書ボランティアなど関連活動者がそれぞれの取組みについて交流し自由に話す場がない。

<読書を広げるアイデア>

○ 学校での取組み

- ・ 読書を「しなければならない」というアプローチではなく、読み聞かせやストーリーテリングなどで本の世界に興味を持てるような取り組みが必要
- ・ 本の賞の受賞作や、学校図書館の貸出数ランキングの紹介
- ・ 低学年だけでなく、全学年での読書時間の実施し、学校での読書時間を確保する。
- ・ 学校図書館の司書は個別に工夫や調査をしているので、他の学校の司書とのつながりや、図書館の司書も交えたネットワークが必要。お互いの活動を発表し合い、良い取り組みの共有を加速する仕組みがあるといい。
- ・ 学校司書と図書館との間で、図書館の情報や知見、地域の図書ボランティアの学校図書運営での活用法などを共有していく。
- ・ 学校司書と図書ボランティア同士の交流の機会をつくる。

○ 図書館・地域での取組み

- ・ 読書習慣は親が子どもに与える影響が大きいことを知ってもらう。どの本を子どもに紹介したらいいかわからない親も多いため、図書館利用をしていない人も含めて、子どもの本に関する情報や学齢期に応じたお勧め本などの情報を発信する。
- ・ 親と子で一緒に図書館を訪れることができるイベントの開催
- ・ 共働きの増加などライフスタイルの多様化に合わせて、図書館等の読書関連イベントの開催の曜日や時間帯、同じものなどを複数回開催するなど工夫する。
- ・ 読書月間などで各地で実施される読書イベントを集約し、学校や親向けにまとめて情報提供することでPR力を高め、子どもに伝わるよう工夫する。
- ・ アニマシオン、ぬいぐるみおとまり会など子どもの読書への関心を高める工夫が広がっている。そのような活動を図書館にもつなげていく。
- ・ 子どもの本に関する活動している団体のコーディネート機能を図書館が持つ。

- (3) 【18歳以上（高校生を除く）対象】②本を介した交流や企画、どんなイベントがあると本を読むきっかけになりますか？

【戸塚地区センター】

○ 読書のきっかけ

- ・ 図書館や本屋で出会うこともあるが、メディアで紹介されたもの、人から勧められた本を読むことが多い。推しの勧める本も読みたい。
- ・ 本の内容以上に、紹介者の本への思いや熱量を感じると読みたくなる。
- ・ 映画やドラマなどの原作は読むきっかけとして大きい。
- ・ 好きな作家の作品は読み続ける。内容もだが、作家の人柄などに惹かれている。
- ・ 本の装丁やデザイン、帯は、本に関心を持つうえで大切な要素
- ・ 知識を増やすための読書と、楽しむための読書がある。

- ・ 読書好きな人は、新しい本や新しい分野にチャレンジしたいと思っており、本の情報やランキングなどをチェックしている。
- ・ 日頃から読書していない人は、話題の本や原作本も知らない人が多い。そのような人に本の紹介でアプローチをしても、読書にはつながらないのではないかと。

○ 本を通じた交流

- ・ 本について語りたいたと思っても、家族や自治会の人とは案外話せない。
- ・ 旭区まちづくりポットのように読書会やビブリオバトルなどのイベントを複合的に行っている活動もある。
- ・ 読書会には参加してみたいと思っているが、自分の興味あるテーマの読書会に出会えていない。
- ・ 読書会を開催したいと思っているが、実際に行っている人に話を聞いてみたい。
- ・ 図書イベント情報をどこで得たらよいかかわからず、小さなイベントや活動は見つけにくい。
- ・ 読んだ本の記録を取り、SNS で発信している。それだけで交流になる。

○ 図書館

- ・ 図書館の雰囲気、本の多い中にいるのが好きで図書館に通っている。
- ・ 図書館に期待した本がない、人気の本は貸し出し予約の順番まちがなかなか回って来ないことが多い。

<読書を広げるアイデア>

○ 読書会

- ・ 地域の読書会情報を図書館で集約するなど、活動を知れるようにする。
- ・ 読書会を始めたい人のために、読書会を既に行っている人の話を聞ける機会
- ・ 読書会を通じた地域コミュニティづくりを進める。

○ イベントのアイデア

- ・ ビブリオバトルなど本の内容だけでなく、個人の本への思いを伝えるイベント
- ・ 作家の人間性などに触れるイベントの開催（横浜市ゆかりの作家のイベント等）
- ・ 聖地巡礼イベント（横浜を舞台にした本に出てくる場所をめぐる）
- ・ 本の帯づくりワークショップ
- ・ 本の装丁や、「本ができるまで」に着目したイベント
- ・ 本の嫌いな人を対象に、本とは違う切り口での呼びかけをする。「スターウォーズ好きな人、図書館に集まれ」など。マニアやオタクと共に読書を広げる。
- ・ 料理、香り、音楽などと本を組み合わせ、五感で感じられるイベント。印象に残る体験として本に触れる機会を増やす。
- ・ フリーマーケットやマルシェなど、図書館以外の場所で本に関するイベント
- ・ 移動図書館、「どこでも図書館」など本を読めるイベント
- ・ 旭区の活動のように、多数の本に関するイベントが集約された活動拠点づくり
- ・ 地域の多様な主体による本に関するイベントや活動の開催情報をまたまたポータルサイト

○ 図書館での企画のアイデア

- ・ 図書館で市民による市民のためのお勧め本を紹介する機会（図書館等での市民による本棚づくり、お勧め本の帯やポップづくり）
- ・ 地域の図書館等において、TVで紹介された本、アニメや映画の原作など時流に応じた、選書や、コーナーづくり
- ・ 目隠し本、本の福袋、おみくじ、占いなどを取り入れ、新しい本と出合う機会をつくる。

【中川西地区センター】

○ 読書習慣

- ・ 仕事での必要性からの読書、趣味のための読書がある。「楽しく読書」の時間を増やしたいし、それが地域で広がるといいと思う。
- ・ 「読書」のイメージがもっと柔軟なものになってほしい。読書は勉強、最初から最後まで読むものと思っている人が多いように思う。
- ・ ビジネスパーソンや子育て中の人には忙しく読書の時間がとれないと感じている。
- ・ ビジネスパーソンの多くはビジネス書を読むが、小説などを読むのは若い時からの読書習慣が続いている人、好きな作家がいる人などではないか。
- ・ ある年齢になると自己啓発を卒業して幅広い世界に触れたい人もいるのでは。
- ・ 読書の記録として、読書ノートをつけている人、パソコンに入力している人に加えて、アプリ「読書メーター」を利用している人が参加者のうち4名以上いた。

○ 読書をめぐる交流

- ・ ワークショップ参加者は多様なイベントに参加経験を持っていた。
出版社や書店主催によるトークショー、ビブリオバトル、読書会、お話会、押し本紹介、つづき図書館ファン倶楽部、図書愛好会、文学フリーマーケット、文章講座、図書館カードコレクション、公園で読書会、児童館での読書イベント
- ・ 読書会に関心があっても参加したことがない人もおり、活動内容だけでなく、どんな人が行っているかを知りたい。
- ・ アプリ「読書メーター」にある交流機能で、他の人が読んでいる本、お勧め本の共有を利用している。

○ 図書館の利用

- ・ 生徒や学生、高齢者は図書館に行くことが習慣になっている人が多いが、ビジネスパーソンは忙しく、借りるよりも購入することが多い。返しに行くのが難しいと感じている人も。
- ・ 図書館に通う習慣がある人は、図書館の掲示や配布物、メール案内などで新しい本やイベントに出会えることをメリットと感じている。しかし図書館に通っていない人はそのようなサービスがあること自体を知らない。
- ・ 本棚があること自体が図書館の魅力。本棚から本を選ぶことが楽しい。新しい本との出会いとなっている。

- ・ 図書館は本を読みたい人のために運営されており、本が苦手な人の視点を入れた選書やイベントは少ないのではないかと。
- ・ 司書と気軽に声をかけあえるようになればいいと思う。気楽に館内を歩いていて声をかけるようなスタッフがいてもいいかも。
- ・ 図書館以外で本に触れる機会や本のイベントがあまりない。
- ・ 図書館と民間企業の連携を増やすと、読書推進が広がるのではないかと。

○ デジタルツール

- ・ 市の電子書籍サービスは使い始めると便利だが、あまり知られていない。
- ・ オーディオブックを運転中や、寝る前の読書代わりに使っている。
- ・ 電子書籍はビジネス書などを購入し、読むのには便利
- ・ 電子書籍は目が疲れるため、長い本をじっくり読む時には向いていないのでは。
- ・ 今は仕事でパソコンを使い、すき間時間や通勤時間で SNS やゲームなどスマホを見るのが習慣の人が多く。だから読書で紙の本をじっくり読む時間を確保したい。
- ・ デジタル社会なので、デジタルから離れる時間としての読書という意味がある。

○ 読書バリアフリー

- ・ りんごプロジェクトのようにアクセシブルな本を一度に体験できる機会があり、内容はとてもいいのに知られていないのが残念
- ・ 読書バリアフリーへの司書の認知度は高いが、教員にまだ理解されていないため、学校への導入が難しい。バリアフリー図書セットを学校で揃えるのは難しい。

<読書を広げるアイデア>

○ イベントアイデア

- ・ 図書館に来る人を増やすための「本以外のテーマ（例：ヨガ、ランニング、地域の歴史）×本」のイベント
- ・ 本の帯、好きな一文で本のしおりをつくるなどのワークショップ
- ・ 遅く読む、一部分だけ読むなど、多様な読書の楽しみ方を伝えるイベント
- ・ オーディオブックの魅力や多様な活用法を紹介するイベント
- ・ デジタルデトックス合宿（デジタルから離れて本を読むのに集中する時間）
- ・ 本屋、図書館以外の街中で本に触れる機会を増やす。民間企業のスペースの活用、野外イベントや公園、マルシェでの図書イベント、まちライブラリー

○ 図書館サービスの拡充

- ・ 市民が選ぶ「ユースのための本」「シニア世代にすすめたい本」「子育て応援の本」などのリストをつくって情報発信する。
- ・ 図書館に通っている人以外にも、メールニュースや SNS など図書館の情報やイベントのお知らせなどを情報発信

○ 市独自の読書習慣づくり

- ・ 市版「読書メーター」。自分の読んだ本を記録できる。図書館の利用履歴も記録できる。それらの情報を集約して横浜の各地区での人気本などがわかる。本を通じた交流や読書会などのイベントの情報のポータル機能なども。
- ・ 市営地下鉄の1車両分を、スマホを見ない読書専用車両に。
- ・ 横浜本屋大賞（横浜の人、書店員が選ぶ）

○ 読書バリアフリー

- ・ 読書バリアフリーについて、教職員、学校の管理職への啓発や研修会の実施
- ・ 単にバリアフリーを発信するだけでなく、読書に課題を抱えている人の存在を伝え、必要性や効果を情報発信する。
- ・ 読書バリアフリーの図書セットを学校に貸し出し、啓発イベントができる制度
- ・ 図書館における読書バリアフリー図書コーナーの設置

3. 全体所見

- 「読書しなければならない」という声では読書推進につながらないという声は、どの会でも聴かれた。勉強や仕事と関係する読書も確かにあるが、読書自体の楽しさを伝えることが大切だと考えられる。
- 子どもの読書習慣には、親や身近な大人からの影響が大きい。また世代を問わず、本の内容だけでなく、紹介する人の思いや熱量が本への関心を高めるという声が多かった。親や教師を始めとする大人達が自分自身の楽しい読書体験を自己開示していくことが、子どもの関心を高めることにつながるであろう。
- 読書推進に関する活動は市内で多様な人が行っているが、担い手の同士の交流の機会が少ないことで、それぞれの努力となっている。多様な担い手が情報を共有し、意見交換ができるプラットフォームが求められる。
〔 学校の図書委員の連携、学校司書の連携、学校司書と図書館司書の連携、
市民活動団体と学校・図書館との連携、学校と図書ボランティアの連携 〕
- 読書好きな人の中には「もっと読書の魅力を伝えたい」「本について話せる機会がほしい」というニーズがあることがわかった。図書館からのお勧め図書の選定や発信に市民参加の機会を広げることが期待されている。その際、中学生なら中学生が、子育て世代なら子育て世代が、というように、世代やライフステージの当事者が参加することが望ましい。
- 全体を通して、デジタルは便利であるが、本と向き合うには紙がいいという意見が世代を問わず多く聞かれた。むしろデジタル社会だからこそ、紙の本を読む時間に特別さがあるという声も聞かれた。新しい視点からの紙の本の価値を発信もできると考えられる。

以上